# 全体討論

丸山：全体討論を始めたいと思います。いくつも質問票をいただいていますが、まず私のほうから今日のプレゼンテーションについて、一言二言まとめ的な話をしてみたいと思います。

まず、里山の定義をめぐって、やはりいくらか分かりにくいといいますか、一種の混乱があるということに関して、質問票で質問されている方がいます。お手元のプログラム冊子をちょっと見て下さい。6ページです（本報告書p.10）。ホルツナー先生のレジュメは、英語版とドイツ語版がありましたが、ドイツ語版の方が少し詳しいものですから、ドイツ語版を私が訳しまして、勝手ですが、その後に訳者の注を付けさせていただきました。

その注に書いたことですが、ひとつはカルチャー（culture）という概念が、私たち日本人が考える場合の「文化」という概念と微妙に異なっている、ということです。両者のあいだには、いくらかギャップがありまして、それについてちょっと書きました

もう一つは、「里山」の定義そのものに関わっているのですが、最初の宮浦先生もお話になったように、「里山」という単語そのものは戦後、四手井綱英さんが使うようになられてポピュラーになってきたのですが、言葉そのものは江戸の初期ぐらいから使われていたことは確かです。

現在は、里山という言葉は大きく二つの意味で理解しているのではないかと思われます。第一には、四手井綱英さんが強調されたような意味での「農用林」です。宮浦先生も、この意味で「里山」という言葉を使われました。農用林というのは日本の場合、米作文化、米をつくるという文化の中で長く必要であった森林地帯であり、これが里山だったと思います。しかし1980年代から90年代にかけて里山研究が始まった時、そういう農用林、あるいは二次林としての森林地帯が生きてきたこと自体が農業と非常に深い関係があるわけですから、実は里山というのはもっと広く農業環境として捉える必要があるだろうという提言がいくつかなされてきました。私は「里山農業環境」という言葉を使っていますが、農用林に、田んぼや畑や用水路やため池といったものがセットにな

った広い意味での里山を、そのまま里山と呼ぼうという提言がなされてきました。特にこれは田端英雄さんあたりからそういう提言が強くあったと思います。

現在は環境省あたりでも「里地里山」という言葉でワンセットで呼んでいます。そういうように広く見ますと、実は里山というのは単に森林地帯だけではなくて、森林を使うことによって生きてきた、農業生活の全体を可能にしてきた景観ですし、地域ですし、一定の複合した機能だったと思います。この意味では、ホルツナー先生が語られたヨーロッパの現場も、里山的なものだと思います。つまり、ホルツナー先生は、オーストリアにおいて、森林が迫ってくる、そういう森林との戦いの現場であるような草原地帯が里山的なものであることを指摘されていたと思います。

最後に話していただいた須藤先生は、バッファゾーン、緩衝地帯としての、つまり野生動物たちと農耕民を中心とした人々とがいわばそこで対峙しあうような緩衝地帯としての里山ということについて話されたわけですが、これは奥山と里山との空間的領域区分に基づいた里山の定義であって、この場合の里山は基本的には農用林としての里山だったと思います。このように、広い意味での、セットとしての里地里山と、そして狭い意味での農用林・二次林としての里山という、二つの意味を込めて現在「里山」という言葉を使っているようです。

考えてみますと、これはホルツナー先生の話の中にも強調されていたように、人類にとっては、農業という営み、農の営みがずっと長い間あったわけで、ホルツナー先生自身ご夫妻ともベジタリアンだそうですが、何かを食べなければならない動物としての人間である私たちが、少なくとも食べているものとしては植物があるわけです。この植物を食べるという営みが農業と深く関わってきたわけであり、農業が後退することで里山的な多様性を作ってきた人の営みが後退している、という指摘がホルツナー先生にあったと思います。これは現在の私たち日本の場合にも考えられる、同じ状況ではないかと思います。現在のグローバリゼーションのなかで農業が後退するなかで、かつての里山が結果的にもたらしていた生物多様性が後退してきているというのは、まさに日本の状況でもあると思います。

そのように考えますと、狭い意味での里山も広い意味での里山も、農の営み、あるいは「農林業」という言葉がありますが、かつては農業と林業とは深く関わっていましたから、農と林という営みは、単純には区別できない仕方で私たちの生活の営みと深く関

わっていたと思います。このように考えますと、農業がどのように関わってきたのかということが大変大きな問題であると思います。

そして、このことは食文化という問題と深い関係があります。パク先生は、現代の韓国において中山間地帯で、新しい様々なイベントを活性化することで、しかも韓国政府が提言しながらもボトムアップ的な仕方でなされているイベントを活性化し、多様に作り上げていくなかで、グリーンツーリズムなども含めて、さまざまな新たな農の営みが生まれている、というお話をされました。新しい意味での農業の営みを活性化するような試みが、韓国においてもみられるのだということが、大変興味深かったと思います。

このように見ますと、私たちの生活全体の中で、どうやら文化の多様性ということが、自然の多様性ということと、いかに深く相関関係をなしているかということが、次第にわかってきて、「里山とは何か」というタイトルを掲げた私たちの本日のシンポジウムは、同時に「自然と文化の多様性」、英語で言えばDiversity in Nature and Culture というタイトルをつけたのですが、まさに問題の焦点を表現したタイトルをつけたなと、手前味噌ですが、そんなふうに感じています。

それから江南先生の江戸時代のお話で大変興味深かったのは、日本の、私たちの美的な感性と非常に深く関わっていたのが里山であったということも言えるだろう、ということです。しかも尾張の大きなダイコンに象徴されるように、かつては地域ごとの特殊性が大変多様であって、ダイコンも現在のように二種類や三種類ではなくて、多様な野菜が各地域ごとにあったわけです。つまり地域の多様性が文化の多様性を作っていたということがあるわけで、現在の市場経済・商品経済のなかで、そういう多様性もまた失われてきました。私たちがあまりにも利便性だけを追求するために、多様な生活の、ローカルな多様性といったものが、見失われてきたと思います。

実は私は専門が哲学ですのでいささか大きいことを言いますが、21世紀の最大のテーマは、私の考えではやはりdiversity「多様性」という観念・理念と、そしてsustainability「持続性」という理念と、「共生」だと思います。共生という概念を、私はsymbiotic co-existenceと訳したいと思いますが、これら三つはもちろん、ホルツナー先生がおっしゃったようにsustainabilityも、それからbiodiversityについても定義が様々で議論が紛糾しているということもあるのですが、しかし、例えば私たちは「平和」という言葉をもっています。「平和」とは何かという定義は千差万別あって大変

難しいのですが、しかし私たちは、一定の理念を示し、私たちに一定の方向性を示す、そういう言葉をもっているわけです。それと同じような意味で、私たちは21世紀にとって重要な言葉として、三つがあると思います。すなわちdiversityと、sustainabilityと、symbiotic co-existenceです。

それでは、いくつか質問票をいただいていますので、それらの質問のいくつかを私のほうで強引にまとめて、改めて質問としたいと思います。

まず、ホルツナー先生にいくつか質問が来ています。「里山」という日本語と同じ言葉はヨーロッパにはないとホルツナー先生はおっしゃったわけですが、ヨーロッパで例えばクラインガルテン〔Kleingarten 小さな庭〕の制作がなされ、広く普及していますが、このことが里山ということだと理解していいでしょうか、という質問です。ホルツナー先生いかがでしょうか。

ホルツナー：クラインガルテンというのは、町に住んでいる人が庭を考え、造るということであって、必ずしも農村の田園風景ということではありません。つまり、里とか山とか村ということではないわけです。クラインガルテンというコンセプトは、大都市の中での小さなガーデンという意味で使っています。ですから里山ということとはまた違うのです。

丸山：クラインガルテンというのは、あくまでも農業とはあまり関わっていなくて、都市部において小さな庭を造るということのようですね。これはもしかしたら江戸時代の園芸ということと深い関係があるかもしれませんが、基本的には、ホルツナー先生は、農業との関わりで「里山」を考えたい、とおっしゃっておられるようです。

次の質問ですが、生物多様性を守るために、ヨーロッパでも日本と同じようなことが進んでいるということがわかったのですが、里山と同じ言葉がないならば、「里山」という言葉をホルツナー先生自身今後使っていただくことはできないでしょうか、という質問です。

ホルツナー：はい、できます。「はい」と申し上げたいと思います。

丸山：「使いましょう」とおっしゃって下さっています。次のご質問が、少しわかりづらいのですが、今日のホルツナー先生のプレゼンテーションにあたって、先生はオーストリアの音楽を使われたわけです。オーストリアというと、ウィーンは「音楽の都」だと日本人はすぐに考えますが、そういう芸術的な文化と、自然の保全の意識とが、どのように関わっていると考えておられるのかを、もう少し聞いてみたい、という趣旨の質問です。つまり芸術が発達したオーストリアで、音楽文化が発達したということと、保全の意識の発達との間に、何か関係があるのでしょうか。

ホルツナー：日本では「オーストリアの音楽文化」という言い方がなされていると思いますが、そういう場合の「音楽」は、前の時代、前の世代の音楽だということができるでしょう。従って自然保全の意識や農村地帯とは関係がないと思います。雅楽と比べてみたらよいのではと思います。日本の今の若い人たちは、雅楽とあまりつながりがなく、関心が低いのではないでしょうか。オーストリアの民族音楽というのがもちろんあって、そのルーツは、昔の音楽です。それがいま最も人気のある音楽かというと、そんなことはありません。ですから今の音楽のルーツは農村や景観ではないわけです。オーストリアの場合でもアートや音楽芸術と景観保全や自然環境の保全とは関係がないといわなくてはいけないと思います。しかしお話を聞いていますと、日本の場合にはアートと里山の関係があるのですよね。そのように理解してよろしいですか。

丸山：「芸術」というのをどう理解するかによると思いますが、ホルツナー先生は芸術のルーツというものを民衆的なものだというふうに考えれば、たぶん日本の場合でも、今日の江南先生や須藤先生のお話の中にもあったように、非常に民衆的なものの中に美しさを感じ取ったり、何かを表現したりするような、ある意味での民衆的な芸術文化と里山とは深く関わっているということは、日本の場合にもあるだろう、と言われたのだと思います。同じことはオーストリアにおいてもある、ということでしょう。ウィーンの音楽というのは都市的なもの、都会的なものですが、今日ホルツナー先生が聞かせて下さった音楽は、むしろ農民的なフォルクローレであって、民衆的な音楽ですから、やはりそういうところでは深い関係があるのではないか、というお話だと思います。

次にもう一つの質問は、どなたがお答え下さってもよいのですが、里山をどう考える

かというときに、歴史的な時間の幅でどこまで遡れるか、という問題と関わっていると思います。例えばボルネオあたりの土地利用を見ていますと、焼畑が非常に重要な意味を持っていますが、例えば熱帯雨林と比べた場合、里山が持っている生物多様性というのはボルネオ地域の原生林がもっている生物多様性と比べれば確実に低いのではないか、と質問の方はおっしゃっています。もしそうだとしたら、全ての場所で里山やその利用が、高い生物多様性を保証するということは、言えないだろう、という質問だと思います。

宮浦：ご指摘のとおりだと思います。生物多様性というのは、里山を維持すれば保全されるというような、そんな単純なものではないと私も思います。たぶんボルネオの大きな木の上にはたくさんの生物が存在しているわけですから、それを切り倒して焼畑にすれば、生物の種の数で考えれば、明らかに生物多様性は低くなると思います。そういういろんなシチュエーションをごっちゃにして里山イコール多様性が豊富ということにしてしまうのは乱暴な意見だと思うので、その辺はこれからいろんなところで整理していけばいいんじゃないかなと思います。

丸山：他にパネリストの方で今の質問についてお答えになりたい方はおられませんでしょうか。パク先生はどうでしょうか。

パク：生物多様性を里山で考え、保存しようということなのですが、確かにそれはいろいろなやり方で考えることができますし、確かな意味をもっていると思います。例えば、いろいろな栽培をし、いろいろな植物種を育てるということが里山で行われています。そして、保護するということと、生物多様性を利用するということの間のバランスをどう保つか、ということでもあると思います。例えば合理的な、あるいはリーズナブルな形で栽培するということ、そしてその生息地を壊さず育てるということは、やはり意味のある保全、環境保護の仕方だと思います。何をするのかと言えば、環境保護が重要だということですし、里山における生物多様性を保全するためだ、ということは確実にあると思います。そう考える人が多く、私もその意見に賛成ですし、それには説得力があると思います。ただし、どのようにしてか、ということが、次に来ます。生物多様性を

維持しながら経済的にも見合う形でいかに進められるか、ということが私の問題であり、追求しなければならない課題だと思っています。

丸山：どうも有り難うございました。他にどなたか答えたい方おられませんか。

ホルツナー：里山についてより広い定義がなされました。科学的な見地もありますが、ある地域について何かをするという場合には、全体を見ることが必要です。全体に関わるということだと思います。全体を大事にしようという関わり方なのです。全部を見なくてはなりません。例えば、プロジェクトがあって、その一つだけに目を向けるのではいけないと思います。生態系のなかの一つとしての生物多様性、ということだけではないのです。里山においては、文化景観ということを、考えるべきです。生物多様性というのは非常に人間的なものでありますから、生物多様性に関するプロジェクトに関わろうとするならば、生物学的な知識よりも以上のものが必要です。人間的な文化の多様性が高度なのか、ということも狙わなくてはいけないと思います。生物多様性は、それに付随してくるはずです。生物多様性だけでは意味がないのです。人間と自然との両方に目を注ぐことに意味があるのです。異なる形もあるでしょうが、生物多様性は、そこに住む人たちの文化景観に合うような形で追求すべきだと思います。

丸山：有り難うございました。生物多様性ということだけの観点を強調することに関しては、ホルツナー先生はかなり慎重なお考えのようです。もう一つ質問ですが、これは須藤先生あたりに答えていただけばよいのかと思います。「鎮守の森」ということについて、それを文化的、あるいは科学的な観点から説明してください、という質問です。

須藤：鎮守の森の何をですか。

丸山：質問者のマイケルさん、直接お尋ねになって下さい。

マイケル氏：長いテーマですから簡単な説明でいいですが、鎮守の森というのは、普通は人が入れない所です。しかし、同じように自然環境だから、文化とか植物、科学的背

景のような、里山と鎮守の森とで、生物多様性（biodiversity）の観点から関係があるでしょうか、あるいは、森の人々の世界観とか。やはり、里山は使う所で、鎮守の森は使えない所、そういうことに関わった自然観ですね。何か説明できますか。

須藤：鎮守の森の場合はですね、先ほどの模式図からいいますと集落の、つまり村のなかにある森なのです。ですから里山、あるいは奥山の森とは異なって、村のなかに残された森という、そういう場所です。西日本ではかつてそういう神聖な空間は、やたらに木を切ったりできない所だったのです。神様をお守りする一つの共同体がありますから、その共同体が合意しないと、そこの木はやたらに手をつけられない。従って昔の植生がそのまま残っているというようなことはよく言われていますが、今日的にはどうでしょうねえ。どれほど残っているのか。ただ照葉樹林ですね、西日本には照葉樹林が非常に良く残っているのが、鎮守の森だというふうによく言われていますが、学問的にはかなり有用な森ではないかというふうに考えています。

丸山生：どうも有り難うございました。もう一枚だけ質問票が来ているので、質問を読み上げたいと思います。一つは竹を引き抜くと土砂崩れの原因になりますか、との質問ですが、宮浦先生がおっしゃるには、必ずしもそうではないようです。竹はケースバイケースで抜いたほうがいいのではないでしょうか。それから、クマの出没はなぜ、と質問に書かれていて、奥山に食べ物はあると思うのですがクマの好物が変わったのでは、と書いておられます。会場の中村先生、どうでしょうか。ちょっとお答えいただけますか。

中村浩二：金沢大学の中村といいます。石川県では二年前と今年とですね、たくさんクマが出てきています。どうしてかということですが、石川県だけで言いますと、一つはクマ自体がかなり増えているのではないかということが言われています。はっきりとは分かりませんが。もう一つは、すぐ町の近くまで、里山が管理されていませんから、非常にうっそうと茂っているのですね。ですからクマの方から見ますとね、奥山も、里の近くも、別に区別がないわけです。以前の考えでは、奥山にいたクマが、たくさん出てくるときには里へ来てまた帰っていくと思っていたのですが、どうも今はそうではなく

て、ずっとそのあたりに越冬するのではないか、というようなことまで言われています。里山が手入れされていない、ということが、いずれにしてもかなり大きな原因になっていると、石川県では言われています。

丸山：これは須藤先生の今日のお話にもありました、里山がかつてバッファゾーン、緩衝地帯という機能を果たしていたのではないかということですね。日本では、数年前からクマの出没が大問題になり、社会問題になってきましたが、実は、今に始まったことではなくて、徐々に徐々に問題が大きくなってきたわけです。里山のかつての機能が低下してきたのが大きな問題であろう、ということは、ほぼ確実に言えると思います。

以上でいただいたご質問はすべて取りあげましたが、他に是非この場でご質問なさりたい方がおられましたら、あと一つ二つ質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。ありませんようでしたら、ちょうど時間も過ぎましたので終わりたいと思います。本日は長時間にわたりまして熱心なご参加を頂き、有り難うございました。

先ほど申し上げましたように、「里山」という言葉が次第に使われるようになって、今日も、ホルツナー先生やパク先生も「里山」という言葉に一定の理解を込めて使われて、話を展開されたわけですが、そのこと自体が、すでに里山という言葉、あるいは里山という言葉をめぐって考えている私たちのこれまでの生活の、そして現代の生活の、いろんな問題がそこに複合的に含まれているということを示しているということが、次第に分かってきたように思うわけです。こういうディスカッションの機会は、さらに今後も設けていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。皆さん長時間、本当にどうも有り難うございました。

最後に本日のパネリストの皆さんに、もう一度拍手をいただきたいと思います。とりわけ外国から来ていただきましたホルツナー先生とパク先生には、私たちの本日のゲストとして遠路はるばる来て頂きましたことを、感謝します。どうもありがとうございました。〔拍手〕